

『社会教育』一九六〇年十二月（全日本社会教育連合会）

青年学級をどうするか

問題は都市の場合にある

矢口 新

みんなで育てた青年学級

青年学級をどうするかという題が与えられたが、どうするといつても、誰かがどうすると思えたからといつてどうなるものでもない。たとえば文部省がどうすると思えたからといつてそうなってくれるかどうか。お役所はとかく自分の思う通りにすることが出来るという錯覚を持ちがちなものだが、そこに大抵の失敗が生れて来る。早い話が、十年前に文部省は青年学級をどうしようと考えていたのだろうか。あるいは、えらい学者の人たちは青年学級をどうしようと考えていたのだろうか。そうして今となつたら、その通りになつたのだろうか。それらの人たちはどう思つていられるか、伺いたいものだと思う。

青年学級がどういうものとして育てて行くかは、たしかに一面では、誰かがどうしようと思えるからにちがいないのだが、そうかといつて、ある特定のえらい力をもつた人、たとえば文部大臣がどう考えたかからといつてそうなるものでもない。見ようによつては、発足当時から十年間文部省やえらい人々が努力したにもかかわらず、それらのひとびとが、頭にえがいた正しいあるべきはずの方向とは似ても似つかぬものに育つて来たともいえるのではないか。青年学級をよいかわるいか

は別としてここまで育てあげたのはみんなの力ではないか。

ある人はそれを青年学級があまりよく育たなかったと考えている。そしてそれは文部省がわるいからだといふような言い方をする人もいる。逆に国民が支部省の意向通りに努力しなかったからだという人もいる。また青年学級は立派に育っている、これで立派に初期の目的である勤労青少年の教育を果しているという人もいる。そしてそれは文部省の方針がよかつたからだといふ人も居れば、支部省の方針はよくなかつたが、ひとびとの努力が実を結んだからだといふ人もいるのである。

青年学級に限らず社会の存在物はなんでもこうして、みんなで、よつてたかつて、こねあげたものなのであろう。それは今の国民のもつている実力の表現なのであろうか。あるものはすべてそうあるべき意味があるのであろう。

このような意味では、青年学級をどうかするのは、総合的主体としての国民であつて、私たちのよくする所ではない。しかし私は、今つくられたこの青年学級を見て、それが、結局どういふ国民の考え方をあらわしているかといふことを後づけてみることは出来るような気がする。多くの人々によつてその分析がなされれば、そこから国民がどうするかをきめることになるのであろう。

「そのままではどうか」

青年学級をどうするなどといふことを問題にする人もいることに間違ひはないが、なぜそんなことが問題になるかと考えている人も少くないのである。一生懸命やつている現場の人に案外そういう人が多い。これは面白いことである。これまで十年やつて来て、いまさうどうするといふのはおかしいではないかといふのも筋は通つてゐる。そう考える人は、青年学級をどうするかなどと言えば、それは何か為に

するために言っているのではないかと疑うのである。

なるほどそうかもしれない。農村などで一生懸命青年をあつめて活動させるべく努力をしている純真な人たちは、純情な農村の青年たちが集って、時には論じ、時には楽しみ、仲よくやっているのを見て、心から満足の意を表している。そんな所へたとえば一九才以下の若い青年が来ていないようだがなどという疑問を出すと、中学校を出たばかりで、もう少ししばらく遊んでからやがて来るようになりますよと達観している。何もそう無理に来たがらないものを来させる必要はありません。しかしもう少し年をとれば必ず来ますと大した確心を示すのである。なるほどそういわれれば、青年の自主的な集りであるからそれでよいわけである。変な疑問を持つ方がおかしいみたいである。またただ一般的な教養ばかりをやっているようすがといえ、青年たちがみんなで相談してやっているのです。やはり青年の意欲が一番大切ですというのである。それも考えてみれば筋は通っている。しかも青年が一生懸命知恵をしぼっていると聞かされてはもう感激してしまふのである。こういう中から青年の仲間づくりが出来て行っていますと事実をもって説明されたらもう一言もいえない。青年の仲間づくりなどということは青年学級を語る人なら誰も認めることであるにちがいない。

こういう事実として生活の中に位置づいている青年学級、あるいは少くとも当事者の中ではそう意識されている青年学級をみて、青年学級をどうするなどといってもはじまらないのではないか。およそ言うべき言葉ではないのであろう。それはそれとして位置づいているのだから、それでよいのではないか。

不満があつたら、別なものをつくれよかろう。やめてもよかろう。よいと思つたらやつたらよいと思う。青年学級というのはそういうものであるのではないか、法律にこだわるわけではないが法律もどうも

そういうようになっていような気がする。

だめだと思ひながらやっていたり、不満があるのにがまんしたりしないで、やめるならやめる、やるならやるとすればよい。出来ないことは出来ないのだから、無理にやろうとしたりしないほうがよい。それを無理をする所に妙な考えが出て来るのではないか。青年学級は文部省の命令でやつたり、補助金が出るからやつたりするものではないのであろう。青年がやるのであり、青年のために援助してやっているであろう。社会教育とはそういうものだと思うが、その辺にいつの間やら、間違つた観念が入つて来たのではないか。青年も大人もとられないで純心になつたらよいのではないか。

青年学級ではどうにもならない都市の青少年

青年学級といっても、決して一樣でないからこうだときめつけることは出来ない、比較的一般的傾向について今は考えるより仕方がない。それは勤労青少年の教育機関だといっているけれども、見たところ青年の中の農村青年、またその中の農業に働く青年のものにしかたないないように見える。その意味では看板にいつわりがある。あるいは別な言い方をすれば、これをすべて勤労青少年のための教育機関とするのはわれわれの錯覚であるとしなければならぬ。青年学級の活動は青少年の自立的な活動によつておこると考えるなら、都市の産業に働く青少年は、そういう青年学級の学習をするという自主的な意欲をもたないと考えなければならぬし、そういう青少年の周囲にある大人どもが青少年を学習させるような雰囲気をつくつてやるから青年学級の学習がはじまるのだと考えれば、都会の大人どもは青年にそういう雰囲気をつくつてやることができないう人たちだと考えなければならぬ。一般に人間は自分のことを悪く考えるのは好きでないから、他をかえりみてものを言う。都会の大人は、都市の青年の学習

する意欲がないというほうが都合がよいし、都会の青年は、大人が本気になっていないからわれわれは青年学級に行けないというほうが都合がよい。これは何も都会ばかりでなく農村にだってあることであるが、都会の方により多くそういうことがみられるということである。しかし青年の意欲といい、大人の努力というも、そんなに簡単なことではない。意欲というも生活全体の発達が起させるものであり、ただ学習したいなどという定義通りのものでない。大人の努力というも、ただ青年学級に通いなさいなどという勧奨を言うのでない。社会全体の生活が青年をその方向にむけるようになることだから、いろいろな問題がある。

農村なら通り一ぺんの勧奨で青年が学級を構成して学習をするかも知れないが、都会ではそうは行かない。第一どこに青年がどういるかさえ把握しにくい。たとえそれが出来ても、通り一ぺんのことでは、とても学級が成立しない。それは都会の青年が多く雇傭されている人たちであり、農村の青年とは生活事情がちがうという点もある。或はまた都会の職場は余りにも種類が多くて、その職場のちがったもの、従って生活上の最も中心になる仕事への関心がちがう青年が集ってもその間に共通のものが生れないということもある。それはしかし職場単位の青年学級を考えればまた別であるが、しかし一般に青年学級はそういう考え方でなく地域主義的に設置を考える常識がある。それは同時に職場の側に青年学級を設けるといふような考え方がないことでもある。職場の経営者や雇傭主にそういう考え方がないのにどうして青年が自発的にそれを押し切ることが出来る。それほど魅力のあるものなら別であるが、都会には多くの学校があり、多くの同年令層の青年が学んでいる。それを見ている者が、小学校や中学校の校舎を借りてこつそりと勉学するような気にはなれまい。もっと面白くて、もっと為になるもの、少くとも本人の意識ではそういうものがふんだ

んにあるのである。

こんなことを言っていたらきりが無いが、そういったさまざまな要素が都会に青年学級を育てないという事実を生み出しているのである。

こう考えると、「青年学級をどうする」などという問題ではなくなるのではないか。都市の勤労青少年の教育をどうしてやるかということにはなるかも知れない。或は青少年の立場で云えば、都会に働く青少年たる者はどう学習すべきかというようになるかも知れない。それはしかし、ただ抽象概念としての都会の青年でなく、上へのべたさまざまな具体的事実をもった青年に即して考えられるべきことである。そういう具体が精細に考察されなければ、「青年学級」をどうすることも出来ないであろう。

私は都市に青年学級が育たない事実を、上のようなさまざまな社会的事実の函数としてとらえる考え方がもっと一般的にならなければ、都市の勤労青少年教育はものにならないと思う。ところが今のところそういう事自体を問題にする雰囲気はまず日本の社会にない。とくに都市の青少年を扱っており、雇っているひとびとの間にそういうことに関心がないのが普通である。そこからは教育問題を科学的に考えることなどは思いもよらない。それではもうお話にもなにもならない。そういうところでは青年学級ということの一部の教育者が口にするのさえ、こつけないものになってしまふ。都会に関しては、青年学級などというものはやめてしまつて、青少年の生活や教育や厚生を巾広く考える運動でも起す方が近道であろう。物事には何でも順序があるとおもう。青年学級などというのは、都会においては一部の人の独善的な観念にすぎないのではないか。そのことを明白に物語るのが都会に青年学級が育っていないということである。

(国立教育研究所)